５　山形大学小白川キャンパス周辺における小学生保護者の不安経験と葛藤懸念[1,2]

福　野　光　輝・渡　邊　洋　一
（文化システム専攻心理・情報領域担当）
山　田　浩　久
（社会システム専攻地域政策領域担当）

問　題

山形大学小白川キャンパス（山形市小白川町１－４－12）のように，大学の敷地が住宅街に立地する地域では，住民と大学生の生活空間が重複するため，住民は交通安全や大学生の振る舞いに対する懸念を抱きやすい。双方の関係悪化を未然に防ぎ，地域における住民の安心感を高めるためには，こうした懸念の実態を把握するとともに，その規定因を明らかにして，方策を検討することが不可欠である。本研究では，そうした探索的試みの一歩として，第１に，大学周辺に居住する住民が，山形大学や山形大学の学生（以下，山大生）に対してどのような印象をもち，大学生との間でどのような危険や不安を感じた経験（不安経験）があるかを，回答者の居住地域との関連も含めて検討する。

第２に，大学生との間で将来トラブルを経験するのではないかという住民の懸念（葛藤懸念）が，どのような心理学的要因に規定されているかを検討する。一般に，特定の相手との否定的な葛藤経験は，その相手とのさらなる葛藤を導きやすい（Pruitt & Rubin, 1986）。それゆえ，大学生の振る舞いに対する不安経験の多い住民ほど，将来の葛藤懸念も強まると予想される（仮説１）。また，この傾向は，不安経験の相手に対する否定的な印象を大学生全体に一般化することで（Quattrone & Jones, 1980），換言すれば，住民が大学や大学生全体に対して否定的な認知をもつことで，より強まるだろう。それゆえ，仮説１の傾向は，住民のもつ大学への印象の好悪によって（仮説２），また大学生への印象の好悪によって（仮説３），調整されると考えられる。

また，山形大学では，平成24年度に本学職員や本学学生による不祥事が頻発した（小倉，2014）。頻発の原因は明確ではなく，特定の要因に帰するというより平均への回帰によって生じた可能性が大きいと考えられるが，平成24年度の初期に大学職員の酒気帯び運転などが相次いで発覚したことにより，結果的に年度を通して，マスメディアが本学職員や学生への注目を強めたことも考えられる。一方，不祥事の直接的な原因とはしないまでも，本学学生の規範意識や社会性の低下と無関係ではないとする議論も起こった（小倉，2014）。こうした経緯もふまえ，実際に，大学周辺に居住する住民が学生全体に対して規範意識の低下を知覚しているのか，またその知覚が強いほど葛藤懸念も高まるかについても（仮説４），あわせて検討する。

方　法

調査対象者と手続き

山形大学小白川キャンパス周辺に位置する３小学校，山形市立第一小学校，山形市立第五小学校，

[1] 本研究は平成25年度山形大学人文学部「山形市における安心・安全に関する学際的研究」プロジェクトの成果の一部である。また本研究は，山形大学人文学部およびＪＳＰＳ科研費2659012901（研究代表者：渡邊洋一）の助成を受けた。
[2] 本論文の執筆にあたり，２名の審査者および編集委員の先生方から貴重な示唆をいただきました。記して感謝いたします。

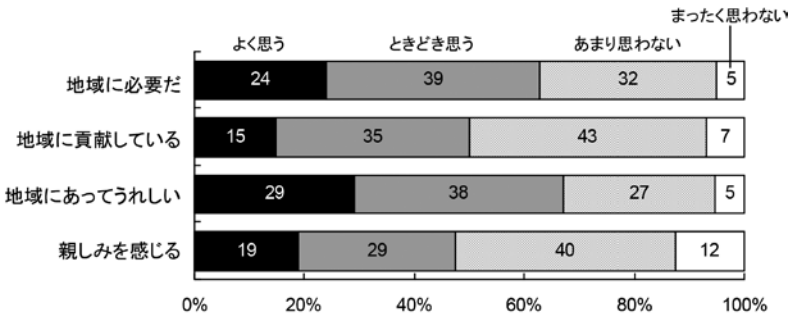

図１　山形大学小白川キャンパスの印象

山形市立第八小学校の保護者（全家庭754戸）を対象に，平成25年（2013年）12月に質問紙調査を実施した。回収数は649部（女性535名，男性104名，性別未記入10名，回収率86.1％），回答者の平均年齢は40.5歳（*SD*=5.1），山形市での平均居住年数は22年（*SD*=14.8）であった。小学校別の回答数は，第一小学校が174名，第五小学校が197名，第八小学校が278名であった。なお，第一小学校は小白川キャンパスから１㎞ほど，第五小学校および第八小学校は小白川キャンパスから300ｍほどに位置している。

質問項目

調査参加者は，表１にあるように，大学への印象（大学への好感度［４項目］），大学生への印象（大学生の規範意識に対する評価［１項目］，大学生への印象［４項目］），大学生の振る舞いに回答者自身やその子どもが危険や不安を感じた経験（不安経験:まったくない［１］～よくある［４］），不安経験の具体的内容，不安経験時の対処，大学生と将来トラブルを経験するのではないかという懸念（葛藤懸念；まったくない［１］～よくある［４］），人口統計学的変数などに回答した。

結果と考察[3]

山形大学小白川キャンパスへの印象

おもに地域における必要性の観点から，山形大学小白川キャンパスに対する印象をたずねたところ（図１），小白川キャンパスを必要と思う人や，地域にあってうれしいと感じる人は６割以上となり，その存在意義は認められているといえる。しかし，地域に貢献していると思う人や親しみを感じる人の割合は５割程度にとどまり，地域貢献や親しみやすさに関しては意見が分かれた。

社会貢献というと，大学はとかく大きな事業に目を向けがちだが，地域住民の期待はもっと身近なところにもあるように思われる。もっとも近年では，身近な取り組みも多数行われているが，大学に対してそもそも関心があるかどうか，もしくはそうした取り組みの意図と地域住民の興味関心とのずれによって，大学との距離を遠く感じている可能性がある。

山大生への印象

山大生に対する印象をたずねた結果（図２），５割近くの人が山大生の規範意識の低下を，少なくともときどき感じると回答していた。一方，山大生という若者が地域に多く住んでいることを肯定的に感じている人も５割以上みられた。同様に，山大生にはもっと地域と関わりをもってほしいという期待があることも示された。

大学職員や学生の不祥事が頻発した翌年度の調査であったことを考えると，山大生の規範意識の低下を強く知覚する人がもっと多くなると予想していたが，地域住民は不祥事の影響を過度に一般化することなく，山大生を冷静に見ているように思われた。しかし，規範意識の低下を５割近くの人が感じていた事実は重く受け止めるべきであり，

[3] データ分析には，IBM SPSS Statistics 22およびIBM SPSS Text Analytics for Surveys Japanese 4を用いた。

表１　本研究で使用した質問項目の平均と標準偏差（*SD*）、信頼性係数（α）

	平均	*SD*	α
山形大学への好感度［４件法］			0.91
私たちの地域に山形大学のキャンパスがあることをうれしく思う。	2.91	0.88	
山形大学小白川キャンパスは私たちの住む地域にとって必要だ。	2.82	0.86	
山形大学小白川キャンパスに親しみを感じる。	2.54	0.93	
山形大学小白川キャンパスは私たちの住む地域に貢献している。	2.58	0.82	
山大生に対する規範意識知覚［４件法］			
「山大生の規範意識が低下している」と感じる。［逆転項目］[1]	2.42	1.00	
山大生への印象［４件法］			0.81
「山大生と、もっといろいろ話をしてみたい」と感じる。	2.02	1.00	
「地域に山大生という若者たちが多く住んでいることはよいことだ」と感じる。	2.60	1.00	
「山大生には、もっと私たちの住む地域と関わりをもってほしい」と感じる。	2.47	1.00	
「山大生は地域の経済を活性化する」と感じる。	2.30	0.91	
山大生の振る舞いに対する不安経験［４件法］			
実際の事故やトラブルまでいかないにせよ、山大生の振る舞いに対して、あなたやお子さんが、危険や不安を感じたことはありますか。	2.15	1.10	
山大生の振る舞いに対する不安経験の内容［自由記述］			
危険や不安を感じたのは、いつ、どこで、どのようなことに関してでしたか。最も印象に残っている事例を１つ挙げ、簡単に書いてください。			
不安経験時の対処[2]			
危険や不安を感じたとき、あるいは実際にトラブルを経験したとき、あなたはそれにどう対処しましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。			
大学生との葛藤懸念［４件法］			
ご自身やお子さんが、この先、山大生と何らかの事故やトラブルを経験するのではないかという不安を感じることはありますか。	1.79	0.89	
社会関係資本			
［地域活動］[3] お住まいの地域およびそれ以外でのものも含めて、あなたは、次に挙げる活動をしていますか。参加しているものをすべて選んで、番号に○をつけてください。			
［家族親戚援助］[4] 日常的に、送迎や見守り、預かりなど、子どもの世話をお願いできる家族や親戚はいますか。あてはまるものをすべて選んで、番号に○をつけてください。			
［援助依頼知人数］[5] 日常的に、送迎や見守り、預かりなど、子どもの面倒をお願いできる親族以外の知人は、どれくらいいますか。それぞれについてもっとも近いものを１～４のなかから１つ選んで、番号に○をつけてください。	3.12	1.46	

[1] 逆転項目のため、数値が大きくなるほど、「山大生の規範意識は低下していない」（山大生の規範意識は高く維持されている）と知覚していることを表す。

[2] 不安経験時の対処については、「本人に直接話した」、「山形大学に連絡した」、「子どもが通う小学校に連絡した」、「警察に連絡した」、「とくに何もしなかった」、「その他（自由記述）」の６つの選択肢からあてはまるものをすべて回答させた。

[3] 地域活動については、「ＰＴＡや子ども会の役員」、「自治会や町内会の活動」、「趣味やスポーツなどのクラブ･サークル活動」、「ボランティア、ＮＰＯ、市民活動」、「その他（自由記述）」の５つの選択肢のいずれかに回答している者を地域活動あり（489人, 75.3%）、いずれにも回答していない者を地域活動なし（156人, 24.0%）とした。

[4] 家族親戚援助については、「同居家族に頼むことができる」、「学区内にいる」、「山形市内にいる」、「山形県内にいる」、「山形県内にはいない」のうち、最初の４つの選択肢のいずれかを選んだ者を家族親戚援助あり（518人, 79.8%）、「山形県内にはいない」を選んだ者を家族親戚援助なし（126人, 19.4%）とした。

[5] 援助依頼知人数については、「徒歩圏内の知人」と「山形市内もしくはその近辺の知人」に分けてたずねたが、これらの合計を援助依頼知人数とした。

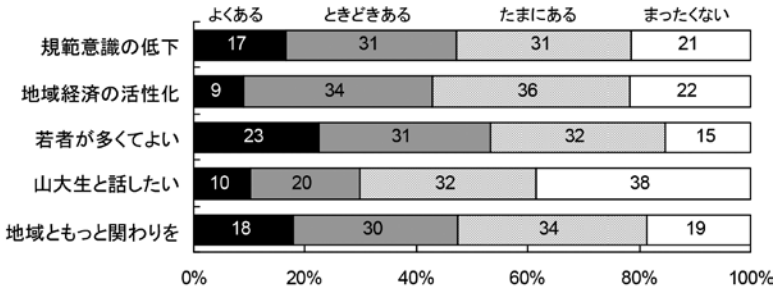

図２　山大生への印象

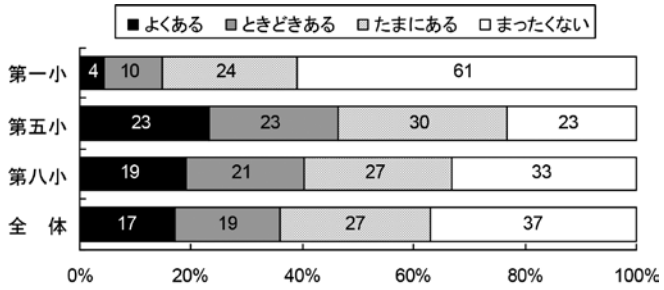

図３　山大生の振る舞いに危険や不安を感じた経験の頻度（不安経験）

山大生のみならず教職員も含めて，印象改善に努める必要がある。

山大生の振る舞いに対する不安経験とその内容，不安経験時の対処

山大生の振る舞いに対して危険や不安を感じた経験の頻度についてたずね，小学校ごとに結果を示した（図３）。不安経験の頻度は，小白川キャンパスとの距離が相対的に遠い学区の保護者より，近い学区の保護者において高かった。とくに第五小学校と第八小学校においては，小白川キャンパスとの距離が近いだけでなく，小学生の通学路と山大生の通学経路が重なる部分もあり，かねてからおもに交通安全上の懸念が存在していたが，これらの学区の７～８割の保護者が，少なくとも１度は，山大生の振る舞いに対して危険や不安を経験していた。不安経験の頻度が大学との距離や子どもの性別および学年によって異なるかどうか，３要因の分散分析を行った。その際，大学との距離に関しては，第一小を遠距離校，第五小および第八小を近距離校としてカテゴリー化した。分析の結果，距離の主効果のみが有意となり（F（1,546）＝59.64，p<.01；遠距離 M=1.53 *vs.* 近距離 M=2.31），近距離校の保護者ほど不安経験が多くなることが示された。

次に，自由記述によって報告された不安経験の具体的内容について集計した。報告件数は，本調査の回答者649名のうち314件（48%）であった（表２）。ただし，ここで挙げられたすべての事例が山大生によるものかどうかは明確でない。回答のなかで最も多かったのは，自転車の危険運転に関するもので，速度の出し過ぎ，右側通行，突然の進路変更や横断，一時停止無視，並進など，基本的な運転ルールの無理解に由来する不安経験だった。次に多かったのは騒音で，とくに夜間における住宅付近での立ち話や飲み会の帰り道での大声を指摘する人が多く，寝ている子どもが目を覚ましてしまうという問題も生じていた。道路の歩き方に関しては，騒音と重複する部分もあったが，歩道や車道をふさぐように広がって歩く行為が問題視されていた。マナーに関しては，スーパーなどの店内での態度や戸外での喫煙について，複数

表２　不安経験の内容（複数回答あり）

（表中の数値は件数）

	第一小（48件）	第五小（125件）	第八小（141件）	全 体（314件）
自転車の危険運転	27（56%）	92（74%）	99（70%）	218（69%）
騒音（道端、アパート、店先、公園など）	11（23%）	25（20%）	33（23%）	69（22%）
道路の歩き方（広がって歩くなど）	11（23%）	14（11%）	29（21%）	54（17%）
マナー（店内での態度、喫煙など）	2（ 4%）	6（ 5%）	12（ 9%）	20（ 6%）
無断駐車や路上駐車	1（ 2%）	8（ 6%）	8（ 6%）	17（ 5%）
ごみの出しのルール違反やポイ捨て	1（ 2%）	6（ 5%）	3（ 2%）	10（ 3%）
その他（公園利用［花火や占有］、自動車やバイクの運転、マスコミ報道など）	5（10%）	8（ 6%）	7（ 5%）	20（ 6%）

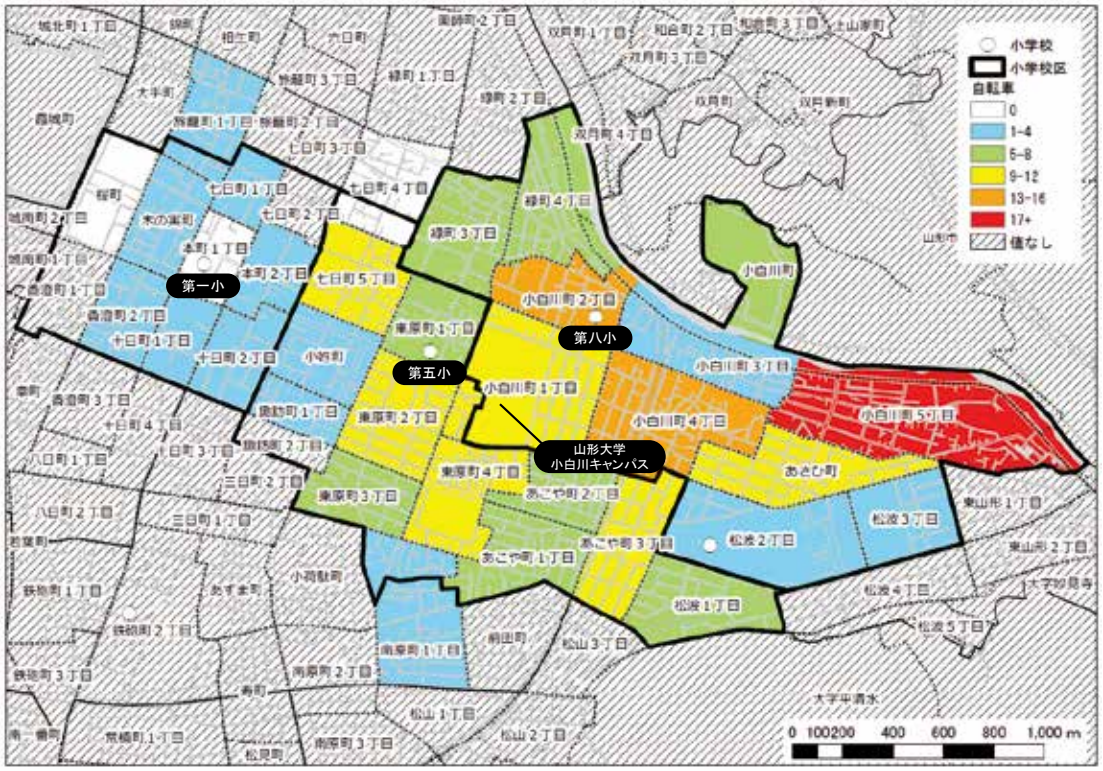

図４　回答者の居住地域別にみた不安経験としての自転車の危険運転

の回答があった。また，無断駐車では，とくに山大グラウンド南側の路上駐車を指摘する回答が多くみられた（図８）。この道路は，すでに述べたように小学生の通学路と重なっており，改善に向けた働きかけが必要といえる。

さらに，不安経験として回答の多かった自転車の危険運転，騒音，道路の歩き方，マナー，無断駐車の５項目について，回答者の居住地域との対応を図示した（図４～８）。これらの色分けは，あくまで回答者の居住地域をもとにしたものであり，騒音を除いて必ずしも不安経験の発生箇所を反映していないことに注意が必要である。ただし，この後の考察においては，ひとまず発生箇所と居住地域がほぼ重複していると仮定する。ここでは不安経験の件数の多かった自転車の危険運転と騒音に関して考察する。まず，自転車の危険運転に関しては，山大生が通学時に利用する経路において不安経験が生じやすいことがうかがえる（図４）。

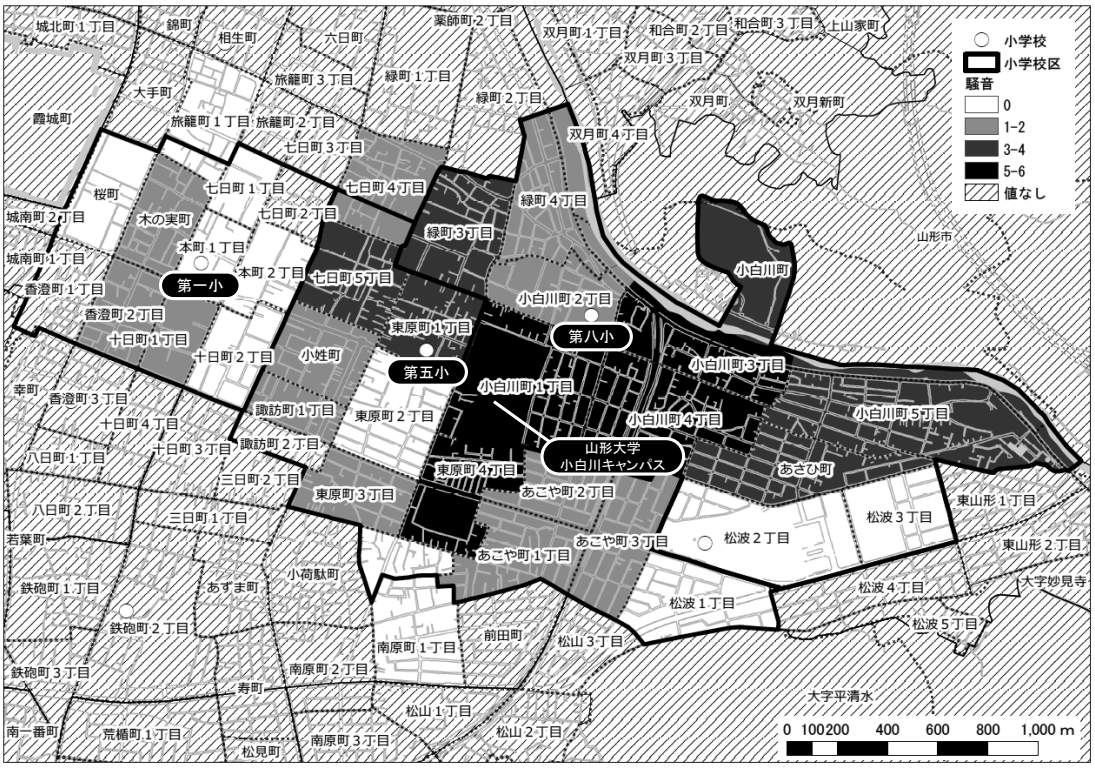

図５　回答者の居住地域別にみた不安経験としての騒音

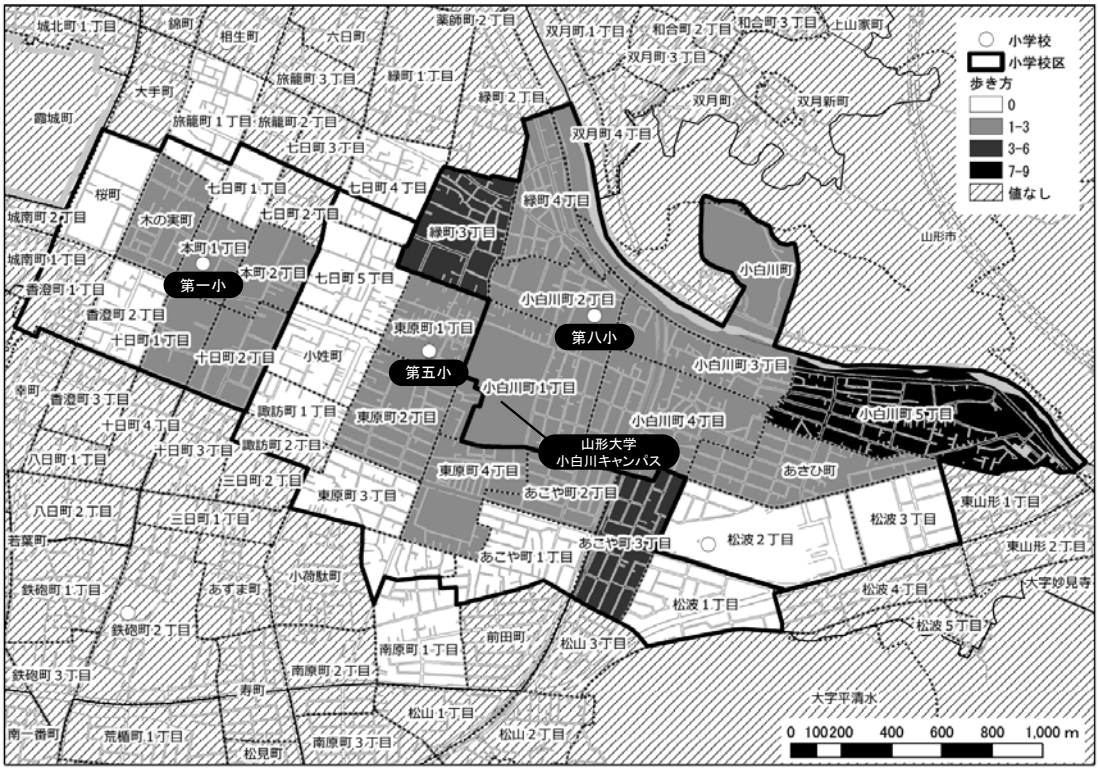

図６　回答者の居住地域別にみた不安経験としての道路の歩き方

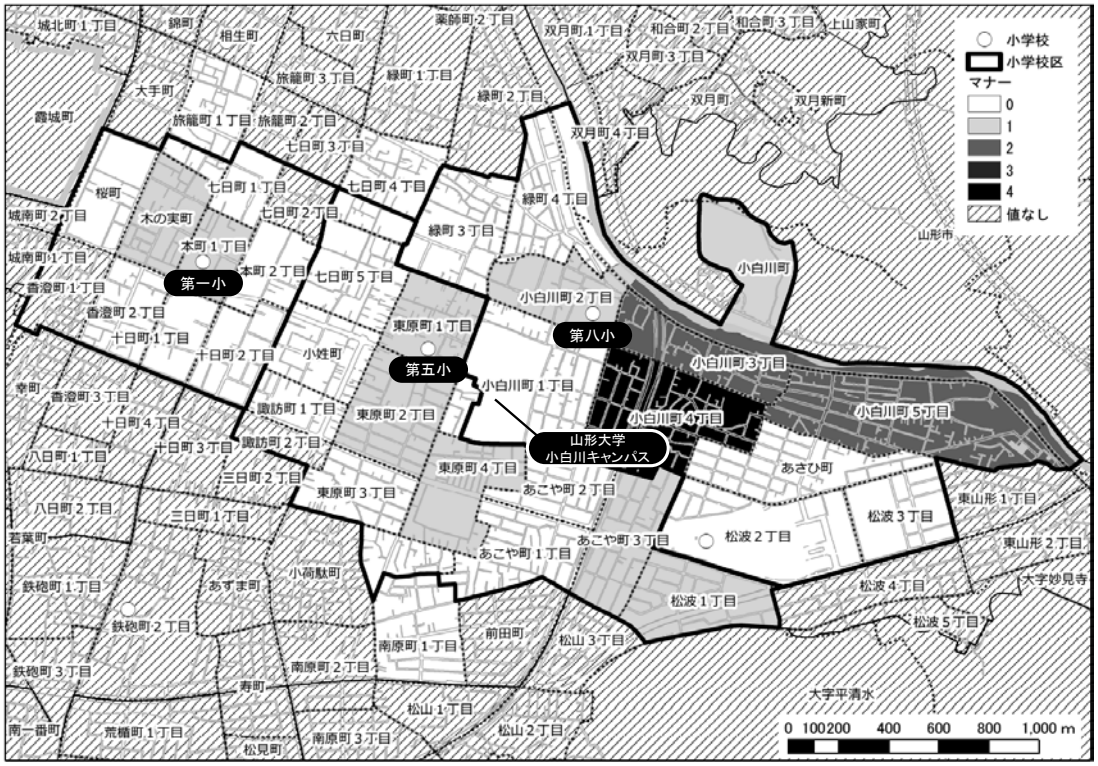

図７　回答者の居住地域別にみた不安経験としてのマナー

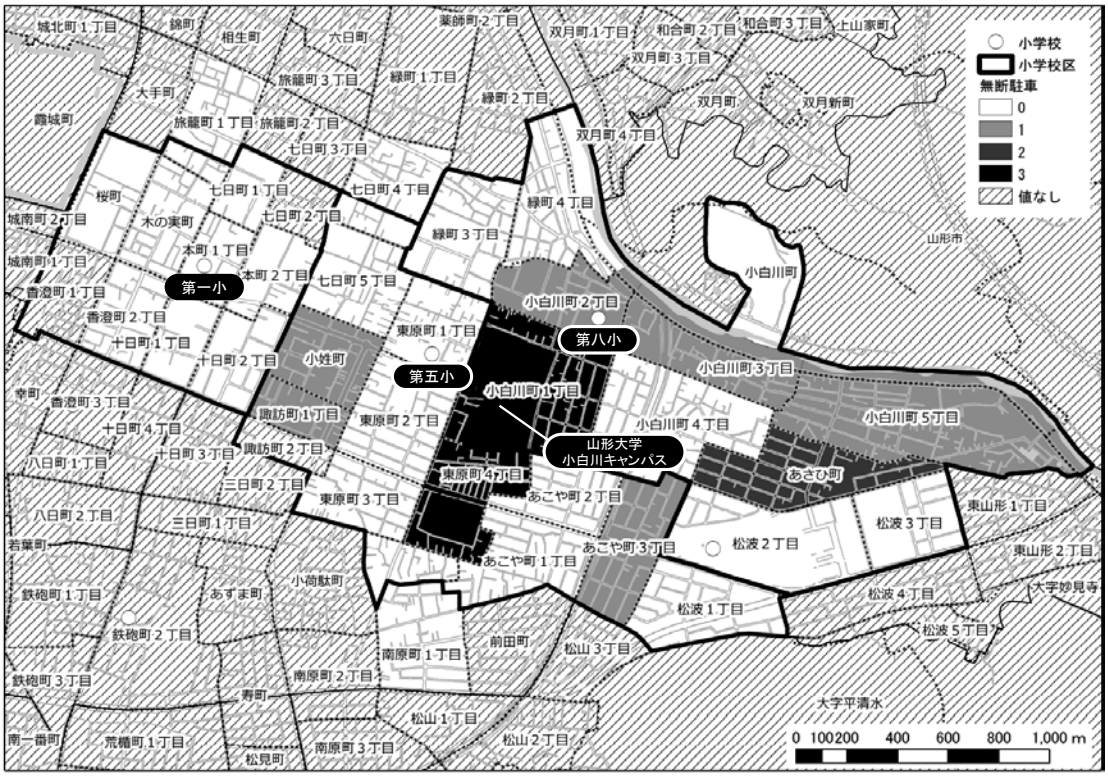

図８　回答者の居住地域別にみた不安経験としての無断駐車や路上駐車

表３　不安経験時の対処（複数回答あり）[1]

（表中の数値は件数）

	第一小（48件）	第五小（124件）	第八小（140件）	全　体（312件）
とくに何もしなかった	41（85%）	91（73%）	118（84%）	250（80%）
本人に直接話した	3（ 6%）	12（10%）	12（ 9%）	27（ 9%）
警察に連絡した	3（ 6%）	8（ 7%）	8（ 6%）	19（ 6%）
山形大学に連絡した	0	2（ 2%）	3（ 2%）	5（ 2%）
子どもが通う小学校に連絡した	0	3（ 2%）	0	3（ 1%）
その他	4（ 8%）	11（ 9%）	9（ 6%）	24（ 8%）

[1] 記入もれなどにより、第五小と第八小の回答数は表２のそれと一致しない。

そのため，小白川キャンパス周辺でとくに件数が多いが，とくにキャンパス東側からの報告が顕著である。小白川町４丁目に関しては，大学への登校時に下り坂となって自転車の速度が出やすいうえに，小学生の登校とも重なり，不安経験が発生しやすいと思われる。小白川町５丁目は，自転車危険運転の不安経験が最も多く報告された居住地域であるが（21件），多くの保護者がこの地域に居住することの反映である可能性がある。そのため，実際の不安経験は小白川町５丁目およびその周辺で発生している場合がある。また，この地域は第八小学区であるが，第八小学校への通学距離が比較的長いこともあり，自転車の危険運転に遭遇する機会も多くなると考えられる。さらに，全体的として小白川キャンパス東側は，大学への通学時に下り坂になる地域であるとともに，道幅も比較的狭い箇所が多く，地理的にも危険度は高い。

次に，騒音に関しては，とくに小白川キャンパス東側における件数が目立つ（図５）。小白川町１丁目および４丁目付近は，山大生がとくに多く住む地域であり，地域住民との生活環境の重複が騒音問題の一因となっていると思われる。この周辺は道幅が狭く，学生の住むアパート内や夜間通行時の話し声などが響きやすいことも関係しているかもしれない。また，小白川町３丁目付近については，おそらく花見や芋煮会の時期に発生する騒音が念頭におかれていると考えられる。さらに，七日町５丁目から東原町１丁目付近にかけては，学生の住むアパートからの騒音もあるが，飲み会帰りの大声が起因しているように思われる。

表３は，表２で示したような不安を経験したときに，それにどう対処したかについての集計結果である。「何もしなかった」という対応が最も多くみられたが，実際のトラブルまでいかない不安を経験した際の対処も含めてたずねた経緯もあり，この回答が多いのは自然かもしれない。また，「その他」として，複数の保護者が子どもに自転車には注意するよう話したと回答していた。表２の結果と合わせて考えると，学生には自らの行為が不安視されていることへの自覚を促すとともに，学生自身が子どもを事故に巻き込む側になりうるという認識を強くもたせることが必要である。

山大生との将来の葛藤懸念

山大生と将来何らかのトラブルを経験するのではないかという葛藤懸念は，全体として５割以上の保護者によって表明されていたが，その程度は遠距離校と近距離校で差がみられた（図９）。葛藤懸念は，遠距離校では３割程度の保護者が感じていたのに対し，近距離校では６割程度の保護者でみられた。こうした葛藤懸念がどのような要因によって規定されているかを検討するため，階層的重回帰分析を行った。その際，まず山形大学小白川キャンパスへの印象に関する４項目を，主成分分析により１次元となることを確認したうえで，平均化して「山形大学への好感度」とした（α =.91，表４）。山大生への印象に関する項目については，主成分分析の結果，規範意識知覚のみが他の項目

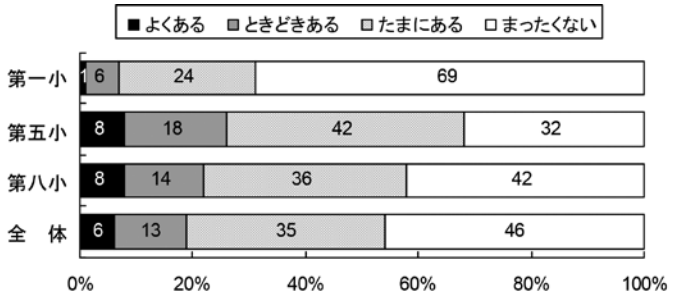

図９　山大生と将来何らかのトラブルを経験するのではないかという懸念（葛藤懸念）

表４　階層的重回帰分析で独立変数として用いた心理変数の平均と標準偏差、および変数間の相関係数

		平均	標準偏差	相関係数			
				2	3	4	5
1	山形大学への好感度	2.71	0.78	.12**	.63**	－.19**	－.27**
2	山大生に対する規範意識知覚[1]	2.58	1.00		.02	－.51**	－.47**
3	山大生への印象	2.35	0.77			－.12**	－.15**
4	不安経験	2.15	1.10				.66**
5	葛藤懸念	1.79	0.89				

[1] 山大生の規範意識知覚の平均値は表１のそれと異なっている。これは本分析で使用したケース数が、表１のそれを算出した際のケース数と異なるためと考えられる。

と別次元になったため，規範意識知覚を「大学生に対する規範意識知覚」（低下している［１］～低下していない［４］）として１項目とし，これ以外の山大生への印象に関する項目を平均化して，「山大生への印象」とした（α =.81）。

また，地域における人づきあいの程度や地域活動への参加に関する社会関係資本項目として，「地域活動」（ＰＴＡや自治会，ボランディアなどの地域活動への参加の有無），「家族親戚援助」（子育てに関して日常的に援助を頼める家族や親戚の有無），「援助依頼知人数」（子育てに関して日常的に援助を頼める親族以外の知人数）をそれぞれ投入して，葛藤懸念におよぼす効果を検討した。社会関係資本は，地域の安定性を高めるという指摘がある（稲葉，2011）。それによれば，匿名性が高かったり，住民同士の近所づきあいが希薄であるといったような社会関係資本の乏しい地域は犯罪リスクも高い。これに対して，本研究の調査地域は，比較的居住年数の高い住民によって構成されており，その意味で住民同士の交流は維持されていると考えられる。そのため，住民による地域活動や日常的な知人関係といった社会関係資本に関する変数が，山形大学や山大生に対する印象や不安経験とは別に，山大生との葛藤懸念を和らげる効果をもつかもしれない。こうした影響を探索的に検討するため，この分析では上に挙げた社会関係資本に関する諸変数を独立変数に含めた。さらに，葛藤懸念に及ぼす心理的な変数の直接的な影響を検討するため，保護者の年齢，居住年数，子どもの性別と学年，大学との距離といった人口統計学的変数を統制変数として投入した。

また，不安経験と葛藤経験との関連がどのような要因によって調整されているかを検討するため，不安経験×援助依頼知人数，不安経験×大学への好感度，不安経験×大学生に対する規範意識知覚，不安経験×山大生への印象の交互作用項をそれぞれ投入した。

分析の結果，(a)大学に近い小学校区の保護者ほど，(b)不安経験が多い人ほど（仮説１支持），(c)大学への好感度が低い人ほど，(d)大学生の規範

表５　葛藤懸念を従属変数とした階層的重回帰分析結果（標準偏回帰係数）

独立変数	モデル１	モデル２	モデル３
保護者の年齢	－.10*	－.04	－.02
居住年数	－.01	－.30	－.04
大学との距離［遠＝０，近＝１］	.26**	.07*	.08*
子どもの性別［男＝０，女＝１］	.03	.03	.03
子どもの学年	－.03	－.01	.00
不安経験［ｚ］[1]		.63**	.48**
地域活動［なし＝０，あり＝１］			.05
家族親戚援助［なし＝０，あり＝１］			－.01
援助依頼知人数［ｚ］			－.02
山形大学への好感度［ｚ］			－.15**
山大生に対する規範意識知覚［ｚ］			－.18**
山大生への印象［ｚ］			.02
不安経験［ｚ］×援助依頼知人数［ｚ］			.04
不安経験［ｚ］×山形大学への好感度［ｚ］			－.10*
不安経験［ｚ］×山大生規範意識知覚［ｚ］			－.08*
不安経験［ｚ］×山大生への印象［ｚ］			.04
R^2	.08	.44	.50
Adjusted R^2	.08	.43	.49
ΔR^2		.36**	.07**

† p < .10. * p < .05. ** p < .01.

[1] 交互作用項の作成に用いた不安経験、援助依頼知人数、山形大学への好感度、山大生に対する規範意識知覚、山大生への印象の各変数はあらかじめ標準化した。また分析では、相関の比較的高い変数どうしも独立変数として投入したが、分散拡大要因（VIF）は最大で山形大学への好感度の1.81であり、すべての独立変数において２以下となったことから、多重共線性は生じていないと判断した（林，2014）。

意識が低下していると感じている人ほど，葛藤懸念を強く抱いていることが示された（表５）。さらに，不安経験と葛藤懸念の関連を調整する変数を検討するために投入した交互作用項のうち，不安経験×大学への好感度および不安経験×大学生に対する規範意識知覚が有意となった。これらの交互作用について単純傾斜検定を行った（Jose, 2013）。いずれの交互作用も，基本的には不安経験の頻度が高まるにつれ，将来の葛藤懸念も強まっていたが，その関連は大学への好感度が高い人（b=.39，p<.01）より低い人（b=.55，p<.01）において強かった（仮説２支持，図10）。また同様の関連は，大学生の規範意識は低下していないと感じている人より（b=.40，p<.01），低下していると感じている人において（b=54，p<.01）顕著だった（仮説４支持，図11）。一方，山大生への印象が不安経験と葛藤懸念の関連を調整すると予想した仮説３は支持されなかった。本調査において，大学生への印象は，山大生ともっと話してみたいであるとか，地域に若者が多く住んでいることはよいといった，山大生に対する関心や地域における山大生の必要性を反映しており，単純に山大生に対する肯定的評価となっていなかったために，葛藤懸念を抑える効果が示されなかったのかもしれない。これらの分析結果から，第１に，将来の葛藤懸念は，過去の不安経験によって強く規定されていることが示された。第２に，大学への好感度を高めたり，大学生の規範意識に対する保護者の認知を肯定的にすることが，葛藤懸念におよぼす不安経験の影響を緩和させる手立てとなり得ることが示唆された。

今後の取り組みに向けて

本調査の結果から，早急に取り組むべき問題の

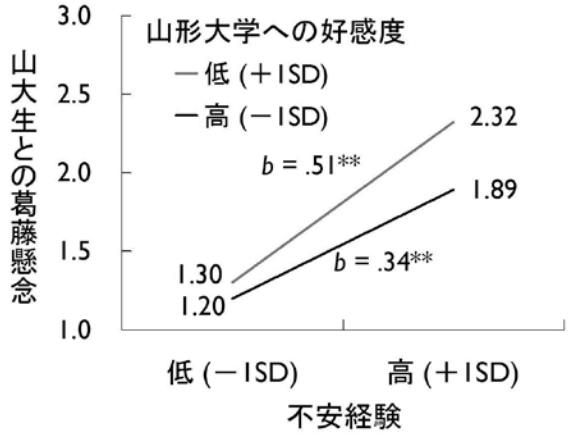

図10　葛藤懸念における不安経験×山形大学への好感度の交互作用

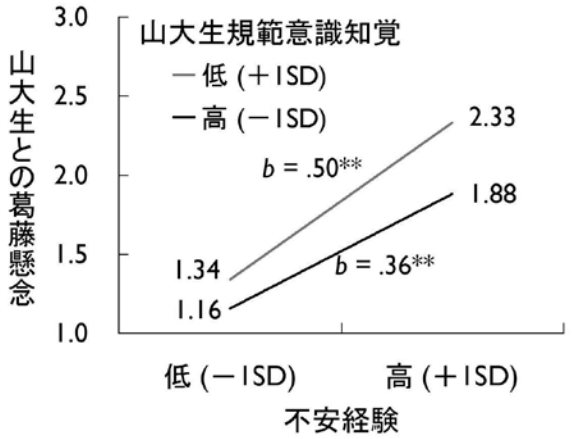

図11　葛藤懸念における不安経験×山形大学への好感度の交互作用

ひとつとして，小白川キャンパス周辺の自転車利用について，その安全性を高めることが挙げられる。そのためには，第１に，自転車利用者に運転ルールを正しく理解させることが不可欠であろう。自転車の危険運転に関する不安の声を大学内で共有し，大学生といえども改めて安全教育を行っていく必要があると考えられる。この点に関しては，平成26年度の「スタートアップセミナー」において，自転車の危険運転などについて考えさせるワークショップが導入された。また，我々は，山大生の自転車運転に関する安全意識を把握する試みも始めた（福野・渡邊，2015；渡邊・福野，印刷中）。第２に，とくに小白川キャンパス周辺では，安全な通行環境の整備も必要である。例えば，山大正門前の通りの「自転車押し歩きマナーロード」化の実現や，小学校の通学路にもなっている山大グラウンド南側の路上駐車への対応が挙げられ，大学内での情報共有と改善に向けた取り組みが急務といえよう。

引用文献

福野光輝・渡邊洋一（2015）．大学１年生の自転車運転意識の変化　東北心理学研究，64，25.

林雄亮（2014）．回帰分析の基礎　三輪哲・林雄亮（編著）SPSS による応用多変量解析（pp.83-98）オーム社

稲葉陽二（2011）．ソーシャル・キャピタル入門　中公新書.

Jose, P. E.（2013）. *Doing statistical mediation and moderation*. New York: Guilford Press.

小倉泰憲（編著）（2014）. 大学生の規範意識と社会性の発達：山形大学学生不祥事防止検討プロジェクトの取り組みから　山形大学出版会

Pruitt, D. G., & Rubin, J. L.（1986）. *Social conflict: Escalation, stalemate, and settlement*. New York: McGraw-Hill.

Quattrone, G. A., & Jones, E. E.（1980）. The perception of variability within in-groups and out-groups: Implications for the law of small numbers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38（1）, 141-152.

渡邊洋一・福野光輝（印刷中）．視点の錯綜と通行危険感知　東北心理学研究.

Troubling experiences and anticipation of interpersonal conflict with university students among parents of elementary school children living near Kojirakawa Campus of Yamagata University

FUKUNO, Mitsuteru

（Graduate School of Social and Cultural Systems, Yamagata University）

WATANABE, Yoichi

（Graduate School of Social and Cultural Systems, Yamagata University）

YAMADA, Hirohisa

（Graduate School of Social and Cultural Systems, Yamagata University）

Abstract

This research examined parents of elementary school children living near Kojirakawa Campus at Yamagata University, regarding parents' attitudes toward Yamagata University, perception of its students, and troubling experiences with its students. This research also investigated antecedents of parents' anticipation of interpersonal conflict with students. Results of a questionnaire survey （N = 754） showed that parents recognized the significance of Yamagata University and its students within their community; however, almost half of the surveyed parents reported troubling experiences with students such as unsafe bicycling, disruptive noisemaking, obstructive walking behavior, poor manners, or unacceptable car parking. Further, results indicated that parents' troubling experiences with students positively and strongly predicted parents' anticipation of conflict with students, and that parents' positive perception of Yamagata University and its students' conduct was negatively related to parents' anticipation of conflict with students. The strong effect of troubling experiences on anticipation of conflict was moderated by positive perception of Yamagata University and its students' conduct. These results suggest that parents who perceive Yamagata University and its students' conduct positively are less likely to anticipate conflict with students in the near future than parents who do not, when parents experience trouble with students. Yamagata University should therefore aim to improve parents' perception of its students' conduct in order to diminish parents' anticipation of interpersonal conflict.